

行政視察報告書

平成29年 8月17日

視察委員会名	教育民生委員会		
報告書作成者	副委員長 新 秀隆		
出席者氏名	委員長 鈴木 達夫		副委員長 新 秀隆
	委員 福沢 美由紀		岡本 公秀
	伊藤 彦太郎		宮崎 勝郎
欠席者氏名	なし		
所管職員氏名	教育次長 大澤 哲也	随行職員氏名	議会事務局 水越 いづみ

視 察 日	視 察 先	視 察 目 的
7月 6日	岐阜県岐阜市立中央図書館	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館建設までの経緯等について ・図書館の機能等について
7月 7日	長野県上高井郡小布施町立図書館『まちとしょテラス』	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館建設までの経緯等について ・図書館の機能等について

今回は、図書館の充実について、特に、図書館建設までの経緯等及び図書館の機能等についてを重点項目として視察した。

岐阜市立中央図書館視察概要

【図書館建設までの経緯等について】

岐阜市立中央図書館を含む『みんなのもり ぎふメディアコスモス』は、市の中心市街地に位置する岐阜大学医学部等跡地において事業展開している「つかさのまち夢プロジェクト」の第1期として、「知の拠点」の役割を担う市立中央図書館、「絆の拠点」となる市民活動交流センター及び「文化の拠点」となる展示ギャラリー等からなる複合施設で、平成27年7月に開館された。

平成16年から17年に、岐阜大学医学部跡地利用について、市民意見を募集した結果、図書館建設の要望が高かったため、その後跡地利用基本構想、基本計画の策定により、第1期施設整備に、市民の意見を反映した図書館が盛り込まれた。

図書館建設にあたっては、学識経験者、図書館関係団体に所属する者、公募の図書館利用者で構成される既存の図書館機能等検討委員会において、新図書館の機能の検討を行った。その後、図書館機能等検討委員会は、平成26年度で廃止され、平成27年度から新たに岐阜市立図書館協議会が設置され、現在も図書館の充実について協議を行っている。

【図書館の機能等について】

図書館旧本館の年間来館者数は約15万人であったが、新図書館の年間来館者数の目標を100万人と掲げ、その達成に向けて掲げられたキーワードは、市民に寄り添った身近な「滞在型図書館」となっている。またこれを基に、「ここにいることが気持ちいい」「ここにずっと居たくなる」「何度でも来たくなる」という3つのモットーを掲げ、「楽しい図書館」を目指す方針が打ち出されている。さらに、今まで図書館に来なかった層の開拓のため、図書館に足を運びやすくし、世代を超えて誰もが集う場所にしようという図書館の思いを掲げている。

図書館の運営は住民参加型の市直営で、単に本の貸し借りのみではなく、住民が持つ生活の知恵と本をつなぐ情報発信の場として、「持続性」のあるまちの活性化に力を尽くしている。

機能面から見ても、コンセプトである「滞在型図書館」として、複合施設ならではの、利用者の目的に応じた施設の使い分けなど、相乗的な図書館の活用が図られている。

また、あらゆる世代が集い、本・人・まちがつながる次世代型図書館として、「企画イベントの実施」、「子どもの育成」、「郷土の魅力」、「ビジネス支援」、「本がつなぐひと・まち」、「図書館ベース事業」の6つの柱に重点を置いた運営が進められている。なお、岐阜市では分館をJR岐阜駅内に設置することにより、通勤客等のニーズへの対応等を図り、中央図書館と分館、それぞれの担う役割を果たしつつ連携を行っている。

さらに、特色としては、図書館利用者の世代や目的に応じてスペースを設置することで、それぞれの世代の居場所を確保している。

また、「楽しい図書館」にするため、利用者に直接接する司書等の意識改革に取り組み、グループワーク実施によるアイデアの事業化などのソフト面の強化にも力を注いでいる。

また、図書館建設後の課題、問題点については、次世代型、滞在型図書館として開館後、年100万人以上の来館者があるが、この来館者数を今後も維持していくためのハード面、ソフト面両面の充実が不可欠であるということであった。

さらに、今後の方向性としては、図書館機能のさらなる充実とより魅力的な企画を、利用者に提案することで、これまでの来館者数の維持を図り、さらには、市民協働のまちづくりの一翼を担うことで、住民参加型の図書館運営、コミュニケーションや情報発信の場としての図書館のあり方を継続していくこととのことであった。



岐阜市立中央図書館での視察の様子

小布施町立図書館視察概要

【図書館建設までの経緯等について】

小布施町立図書館『まちとしょテラス』は、平成18年に公募により設置された「図書館のあり方検討会」から翌年に提出された報告書、住民懇談会や意見交換会などの意見を踏まえ、「新しい小布施町立図書館の基本構想」を作成し、「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」を4つの柱として、「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」を運営理念として建築された。

図書館の設計については、全国公募を行い、166件の応募から最終的に残った5案について、町民公開のプロポーザル審査（住民代表2名を含む）を行い決定された。なお、設計決定後、町民約100人で組織する建設運営委員会で意見交換を行い、安全面を重視したいとの要望に応じて、設計案の修正を行い、平成21年7月に開館された。

また、図書館の館長についても、全国公募により選任を行った。

図書館の愛称についても、全国公募を行い、224点の候補全てを、図書館公式ブログ等で公開し、図書館建設委員会が検討し、『まちとしょテラス』に決定された。

なお、小布施町立図書館『まちとしょテラス』は、平成24年、日本図書館協会主催、第28回日本図書館協会建築賞及び日本建築美術工芸協会主催、第22回AAC A賞を受賞し、平成25年に「死ぬまでに行きたい世界の図書館15」に選ばれている。

【図書館の機能等について】

小布施町立図書館まちとしょテラソでは、「本と人をつなぐ場」として、毎月テーマを決め、スタッフ手作りのポップを添え、閉架図書を含めた書籍を展示する「テラソ百選」、内容が推測できるキーワードを貼付し包装した本の福袋などの取り組み、「本を介して人と人をつなぐ場」として、読み聞かせや本の無料配布などを行う「図書館まつり」、「創作活動・表現活動を応援する場」として、「花の童話大賞」の公募や本に関係するワークショップの開催、「子育ての場」として、ボランティアの皆さんによる「読み聞かせ会」や小・中学生対象ワークショップの開催なども行っている。これらの各種イベント開催日の来館者数は、通常来館者数の5割増となっている。

また、気軽に寄れる図書館として、来館者と司書等図書館スタッフとの距離感を近くし、スタッフのモチベーションを高めるため、自主性を尊重した人材育成を行っている。

また、平成24年から、個人宅や店舗の一角に本棚を設置し、来訪者が自由に本を楽しむ「まちじゅう図書館」に取り組んでいる。

この取り組みは、本をきっかけに人と人との交流が生まれることを目的とし、まち角に「本がある」場を通じて、人と人が繋がっていくことを願い、「いつもワクワクする情報がある」という活動を一緒に楽しんでいくというものである。本年からは、5カ年計画で、まち中に100棚の設置を目指して活動している。

年間来館者数については、新図書館の開館により、旧図書館と比較して6.5倍に増加した。しかし、登録者の52%が町外住民であり、その要因は、近隣住民に市町の区切り意識が低く、隣市住民でも小布施町の方が近い場合は、利用いただいていることが考えられるとのことであった。小布施町民の図書館利用に対する思いの把握により、現状をどう変えていくかが今後の課題とのことである。



小布施町立図書館での視察の様子

【所感】

今回視察した両図書館は、ともに、市民のニーズを的確に把握した、きめ細かい対応をしており、図書館を「本を借りるため」だけではなく、「情報発信の場」として捉え、積極的に幅広い取り組みを行っていた。また、館内の至る所に来館者をあきさせない工夫がこらされているところが大変印象的であり、亀山市にも取り入れるべき考え方であると感じた。

また、「楽しい図書館」「世代を超えて誰もが集う場所」としての図書館の空間の在り方を示すことにより利用し易くしたところや、図書館スタッフと来館者との距離を近く設定し、あらゆる世代に対応した各種イベント等の企画が充実しているところや、その企画等を行う司書等図書館スタッフの育成（意識改革、能力向上）に力を注いでいるところが特徴的であると感じた。

また、館長に公募制を取り入れることで、幅広い視野を持った人材による、より自由な図書館のあり方が期待できる一方で、財源の確保や職員体制の強化など、行政としてのサポート体制の必要性を感じた。

亀山市では、これから、新しい図書館整備の具現化に向けた協議等が始まる。今回の視察により、図書館の充実のためには、現状の課題、問題点をクリアすることはもちろんであるが、まずは、利用者である市民の声に耳を傾けることの重要性を再認識した。そのうえで、さまざまな利用者に対応した図書館サービスの充実、市民が利用しやすい機能・設備の拡充及び司書をはじめとした専門的知識の備わったスタッフの充実が必須であると強く感じた。